

「第7回交通安全・国民総ぐるみ運動中央大会」 に参加して

去る1月19日、20日の2日間、東京の日比谷公会堂を主会場に開かれた「第7回交通安全、国民総ぐるみ運動中央大会」には、市から特別に派遣された城南小学校5年生の大木愛一君と夏目真紀子さんの2人が参加しました。

同校の高松末治先生に引率されて出席した2人は、全国から集まった子どもたちとともに、被害者の体験発表に強く胸を痛めながら、交通事故をなくすための運動のやり方について真剣に話しあってきたそうです。

2人は、この大会で感じたことを合作して市役所に寄せてきました。

以下はその感想文です。

(第1) 1日目の1月19日は、地方組織部会、運送事業者部会、運転車部会、婦人部会、子ども部会、交通安全年間スローガン普及部会の6つ部会に分かれてそれぞれ会議が開かれました。

わたしたちは日本都市センターで行なわれた子ども部会に入りました。

子ども部会には50以上の小、中学校から約150名参加し、交通安全について自分の考えや、自分の学校で行なっているいろいろな方法を発表しました。

発表した学校の中には、トラックがたくさん通るせまい道を何キロも自転車通学しなければならぬ山村の中学校や、友だちが死んだ埼玉県川越市の小学校での事故防止運動などの発表もあって、交通安全の大事さがよくわかり、もっと真剣になって交通安全に力を入れなければならないと思いました。たとえば信号の守りかたです。

もう、信号が黄色に変わったのに渡りだす人や、赤でも平気で渡っている人がたくさんいます。もし自動車が走ってくればどうなるかは、わかっているはずですが、できないことをできるまで努力することはむずかしいと思います。わかりきっている事を実行するのは簡単にはずです。それを実行しない人が多いから交通事故が多いのだと思います。私たちは勇気をもって交通安全に努めなければならないと思いました。

発表した学校はどれも交通安全運動にいろいろな方法で努力していましたが、とくに多かったのは、校外活動では集団登校や通学路をきめている学校、校内活動では歩行免許証や交通標識をろうかなどにはりつけている学校がめだちました。

この2つは私たちの学校でもやっているので、やはりどの学校でも考えることは同じだと思います。

おもしろいと思ったのは交通公園でした。これは、いろいろ交通のきまりの手本になるような道具がそろつてい

る所で、校庭にあるのです。

朝はここを一周してから校舎に入るのだそうです。これをやつて交通のきまりを覚えられるのなら、私たちの学校にもほしいと思いますが、これだけの設備を整えるにはとても大変なお金がかかると思いました。

会議の最後に沖縄の代表がいった「交通安全は設備より1人1人の心がけがいちばん大切なのだ…」ということばに私たちは強く心をうたれました

(第2) 2日目の22日の本会議は、日比谷公会堂で行なわれました。ひたちの

感想文

城南小学校5年

大木愛一
夏目真紀子

宮内殿下や佐藤首相もお見えになって会場は2階まで満員になりました。国歌せい唱は、その声一つ一つに交通安全についての考えや、交通事故へのにくしみ、悲しみ、希望などがこもっているような感じがしました。

ここで一番心をうたれたのは、ある交通事故の追憶でした。急に会場のライトが青に変わって女の人の悲しいうらなげが聞こえてきました。子どもを交通事故でなくした母の悲しみをうたえたものでした。

それは自転車に乗った青年が横断歩道で止っていると、後からフルスピードで走ってきたトラックに6メートルも引きずられたという、むざんな話でした。この青年は交通のことにはくわしく、よくおおかさんにも教えていたということです。よく説明できませんが、私たちは青年をひいたひどい運転手へのにくしみより、子をなくした母の悲しみになみだが出そうになりました。うしろで聞いていたおばあさんは

声をあげて泣きました。前のだんにすわっているえらい人たちもめがねをとって目をふきました。みんな泣いていました——

私たちは被害者の立場を聞いて、はじめて被害者の苦勞を知りました。テレビで交通事故のニュースを聞いて一時「かわいそうに——」と思うくらいで、その後の遺族のかたの生活などを考えて見たこともないのです。

この大会に参加して、交通安全というものがごく身近かなものになったような感じがします。

さいごに、交通安全のために努力した人たちの表彰がありました。その時私たちは、日本中の人々がみんな交通安全のために努力して、だれを表彰したらよいかかわからないくらいになればいいなあ、と思います。

この大会に参加してほんとうによかったと思います。みんなが真剣になって話し合っているのを聞いて、何が今いちばん大事なことがよくわかりました。

まず、沖縄の代表がいった1人1人の心がけがいちばん大切なことではないでしょうか。

それにもう一つ、交通安全のための設備をもっともっとよくし「交通事故0の日」が夢に終わらないように、皆んなと一緒に努力していきたいと思えます。

大館に帰ってきて、さっそく校内で報告会をし、つづいて市内13校の代表と座談会を開き、大館市の各学校のこまっていることや、努力していることを話し合いました。

そして、おまわりさんから交通事故の注意などを聞き、まず私たち子どもの事故がこの大館から1件もでないようにお互いに努力することをやくそくしました。

最後に昭和42年は、交通事故は去年の半分以下にへったといわれるような、年になってもらいたいと心から願っています。(おわり)



大木君

夏目さん